

## 伊勢・三河湾 再生のシナリオ

写真は伊勢湾研究会の編集による 1995 年刊行の共同の書。私も研究会メンバーであり、第 4 章「新伊勢湾時代」の海と開発を担当した。名古屋市立女子短大に勤務していたころの共同研究の成果である。久しぶりに、本書を手にした。

第 10 章 伊勢・三河湾の回復条件で、西條八東先生は次のように締めくくっている。

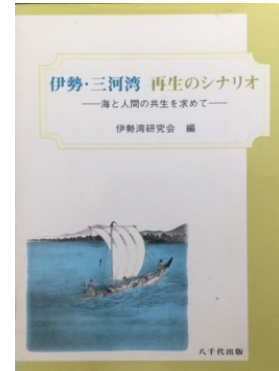
われわれは、改めて伊勢・三河湾があったおかげで、東海地方は大きな進歩を遂げることができたことを想起すべきである。ところが、現実には、最後に残された美しい自然を、「環境にやさしいリゾートの創造」を口実に著しく改変し、遊園地とかディズニーランドのような「新たな汚染源」をつくろうとしている。本来あった豊かな自然の海を取り戻し子孫に伝えることは、われわれの重大な義務である。目先の利益のために大きな土木工事を行い、かつての海を回復するどころか、逆に海の汚濁を進めてしまうような開発計画を、このあたりで考え直してほしい。一方で、そのような開発を許してきた住民の側も、厳しい批判の意見を表明して行動すると同時に、沿岸漁業の重要性を認識し、漁業者と一緒に、「新鮮な魚が食べられる」かつての豊かな海を取り戻すように暮らしのなかから努力していくことが重要であろう。

西條八東先生には、なにかとお世話になった。とりわけ中部国際空港の関連開発などで、貴重なアドバイスをもらった。またレポートにも書いたように、私が朝日新聞「声」に投稿したとき、すぐに激励の手紙を頂戴した。西條先生は 2007 年に亡くなられた。

海の博物館館長の石原義剛さんは、第 6 章 海をどうよみがえらせるか? を次のように締めくくっている。

海を守る運動に、これまで漁業者たちは消極的であり過ぎた。一つには市民、住民運動のあまりの純粋さ、過激さについけなかった。自然を守れとは、魚やカニを獲るなど同意語だと漁業者側は理解し、それでは俺たちは飯も食えなくなると、運動に歩調を合わせなかった。しかし、もう相互に理解しあえる時代に至った。自然を回復し美しく残すことで、利害が一致することを、ともに知った。陸の人びとは優れた生活環境として、新鮮な海産食糧の源として海を必要とする。海の人びとは環境管理人の仕事をして、食糧生産に従事する。…… 数千年を超えて蓄積された漁業者たちの経験に基づいた智慧は、風を知り、潮を知り、生きものを知り、海のすべてを知っている。そしてそれを子どもたちに、陸の人たちに伝えることができる。漁業者が漁業だけで生きる時代はもう終わった。

石原義剛さんから、多くのことを学んだ。石原さんが 9 月 17 日に亡くなられたことを新聞で知った。



(2018 年 10 月 2 日)